

参 考 資 料

氷見, 小矢部に発生したコレラについて

富山県厚生部公衆衛生課

近年の航空機の発達に伴い、国際間交通の増加、高速化、大型化が急速に進歩したため海外旅行が容易となり、今までになく航空機を介しての伝染病、特にコレラの侵入問題が社会的にクローズアップされるようになった。

本県におけるコレラの発生は、昭和44年10月、伏木港停泊中の韓国帰りの貨物船「熊福

丸」の乗組員4人からコレラ菌が検出され、幸いにも上陸は防止することができた例はあるものの、昨年11月、氷見、小矢部で発生したコレラは、上陸例としては、まさに昭和21年の復員コレラ（患者78名）以来34年ぶりのことであった。（表-1）。

ここにその概況を報告する。

表-1 コレラパンデミー

欧州からみた コレラ パンデミー	始まった年	日本における流行				富山県における流行				備 考
		始まった年	患者数	死者数	致命率	流行期間	患者数	死者数	致命率	
第1回	1817	1822(文政5) 朝鮮～	数万人多	数						インドガンジス三角州から
2	1829									
3	1852	1858(安政5) 中国～ 1862(文久2)	数十万人 ?	数十万人 ?						1854ロンドン市ブロードストリート の流行
4	1863	1877(明治10) 中国～ 1879(明治12)	13,710	7,967	58	6.15～11.23	29,808	12,144	41	西南の役 石川県とも
5	1881	1881(明治14) (" 15) 1885(" 18) (" 19) 1890(" 23) (" 24) 1895(" 28)	9,328 51,631 13,772 155,923 47,019 11,142 55,144	6,195 33,784 9,310 108,405 35,227 7,760 40,154	66 65 67 69 76 67 72	7.13～11.30 5.25～11.20 7.10～11.3 ?	1,313 16,268 19 3,451	852 10,761 12 -	65 66 63 -	コレラ菌発見(明治17) ローベルト・コッホ
6	1899	1902(明治35) 1907(" 40) 1916(大正5) 1919(" 8) (" 9) 1929(昭和4) 1937(" 12) 1945(" 20) 1956(" 21)	13,362 3,632 10,371 2,912 4,985 205 57 -	9,226 2,526 6,260 915 3,121 116 11 -	69 69 60 31 69 56 19 -	9 ～ 10 (大正6)	419 (大正6)448 221	140	59	
7	1961	1963(昭和38) 1964(" 39) 1977(" 52) 1978(" 53) 1979(" 54) 1980(" 55)	1 3 110 70 28 22	1	33	11.15～12.6	3			セレベス島マツカサル地方から 和歌山県など 東京池之端文化センターなど 富山、石川県など

1. 海外渡航者の状況

最近の海外旅行ブームにより本県から海外への渡航者は、年々増加の一途を辿り昭和54年の旅券発行者は表-2のとおり18,125人を数えている。

又、国際保健規則で定められたコレラ汚染地域は、現在でも東南アジアの諸国に多く、

表-2 渡航先別旅券発給状況

5 1 年			5 2 年			5 3 年			5 4 年		
順位	渡 航 先	発給数	順位	渡 航 先	発給数	順位	渡 航 先	発給数	順位	渡 航 先	発給数
1	米 国	2,991	1	米 国	3,073	1	米 国	4,008	1	米 国	5,263
2	台 湾	1,672	2	台 湾	1,906	2	韓 国	2,345	2	香 港	3,268
3	香 港	1,404	3	香 港	1,594	3	台 湾	2,338	3	台 湾	2,889
4	韓 国	1,103	4	韓 国	1,417	4	香 港	1,558	4	韓 国	2,199
5	フィリピン	331	5	フィリピン	961	5	フィリピン	735	5	フィリピン	1,047
6	フ ラ ン ス	294	6	フ ラ ン ス	307	6	タ イ	480	6	中 国	577
7	タ イ	255	7	タ イ	307	7	フ ラ ン ス	461	7	シンガポール	542
8	英 国	252	8	英 国	294	8	シンガポール	283	8	フ ラ ン ス	438
9	ソ 連	160	9	シンガポール	255	9	英 国	258	9	タ イ	427
10	シンガポール	155	10	インドネシア	182	10	中 国	226	10	西 ド イ ツ	188
そ の 他		907	そ の 他		1,105	そ の 他		1,004	そ の 他		1,287
計		9,524	計		11,401	計		13,696	計		18,125

(富山県総務課外事係調)

2. コレラ患者発生の経緯 (図-1)

11月12日午後10時30分、厚生省公衆衛生局保健情報課より電話連絡があり、フィリピン、マニラ帰りの石川県人がコレラ患者として認定され、富山県からの同行者5名の健康調査実施依頼があった。

このため直ちに関係保健所、衛生研究所へ健康調査の実施を指示するとともに旅行中における健康状況等の聞き取り調査及びマニラ旅行者リストの作成を急いだ。

この結果、出発から帰国まで(11月7~10日)、石川県患者らと同行した県人は5名ではあったものの、マニラへの往復の飛行機が一緒であった同乗者が外に県人で18名いることがわかった。

そこで、この18名についても健康状況を確認すべく関係保健所及び衛生研究所へ指示し、併せて消化器系伝染病の細菌学的検査を実施した。

衛生研究所において上記23名の同行者、同

それら汚染地域への旅行者も年々増加の傾向を辿っている。

更に、県人が海外へ旅行する際はほとんどが東京や大阪国際空港であったが、昭和54年7月1日石川県の小松空港が検疫飛行場として指定されたこともあって、一層海外旅行が手近なものとなっている。

乗者について厚生省作成「コレラ菌検査の手引き」等に基づき検査を進めていたところ、そのうち氷見市の男から平板上に疑わしい集落が発見され、ほぼコレラ菌であることを確認した。

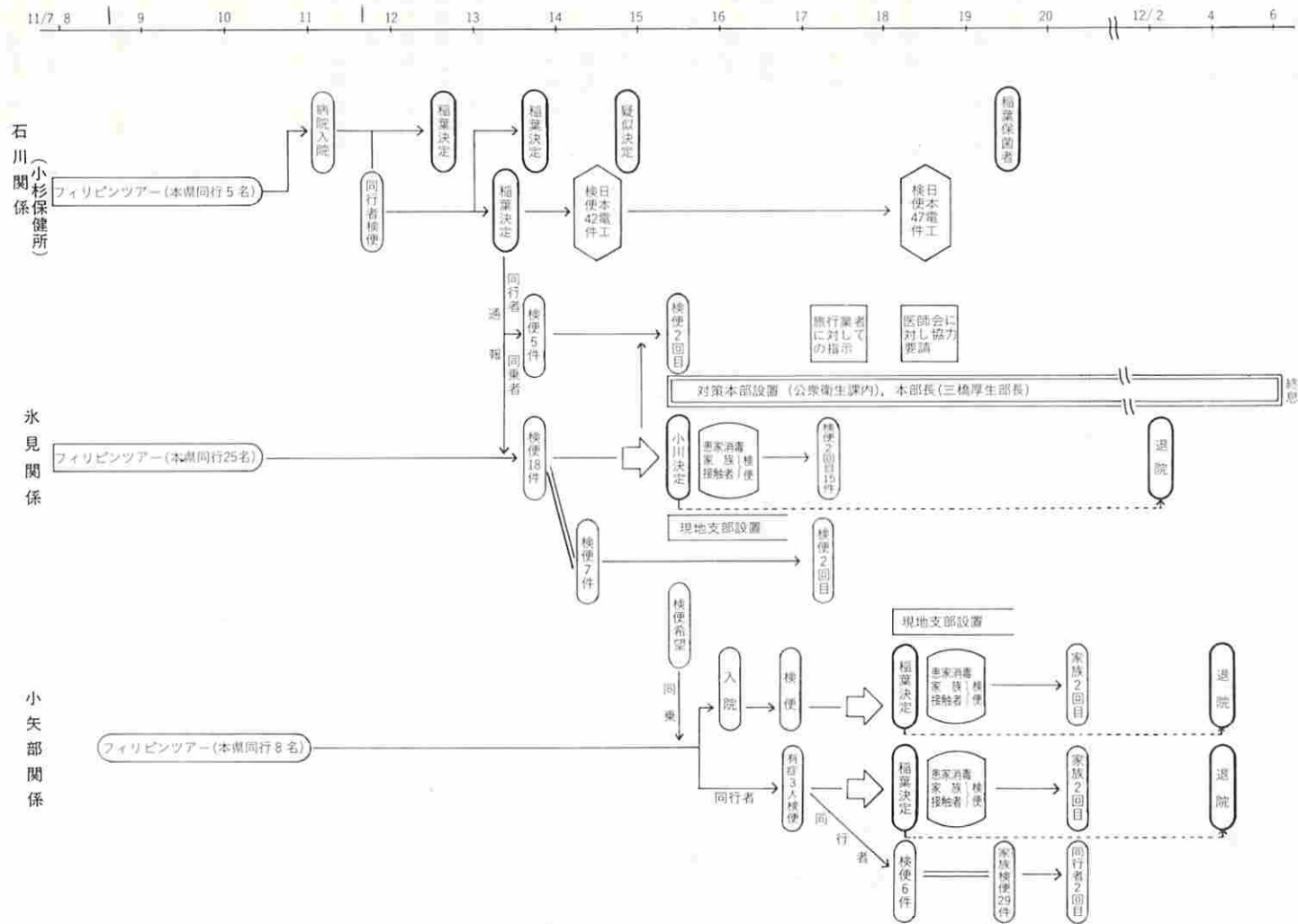
コレラの決定は法令等により最終的に国立予防衛生研究所が行うこととなっているため、急きょ菌株を国立予研へ輸送し、菌株精査の結果コレラ菌であることを決定した。

一方、翌11月16日午前11時、北陸中央病院より、マニラ帰りの旅行者が下痢症状を主徴として入院し、コレラの疑いもあるとの通報が所轄の小矢部保健所へあった。

このことから早速状況調査をした結果、この入院患者は前述の旅行グループとは日程が1日遅れ(11月8~11日)の別グループではあるものの、マニラでの行程はほとんど同じであること、又県人はこのグループに8名いることがわかった。

この入院患者のコレラ菌検査について病院

図-1 コレラ患者発生の経緯とその対策



と衛生研究所が併行して検査する一方、同行者7名についても検査を進めた結果、入院患者及び同行者1名計2名（ともに小矢部市、

男）がコレラであることが判明し、11月18日午前、国立予研の精査を待って最終決定を行った。（表-3）。

表-3 患者状況

番号	診定月日	退院月日	入院日数	患者	住所	菌型	観光日程
1	11月15日	12月2日	18日	男、33歳、会社員	氷見市	小川	11月7～10日 フィリピン (県人18名参加)
2	11月18日	12月4日	22日	男、57歳、農業	小矢部市	稲葉	11月8～11日 フィリピン (県人8名参加)
3	11月18日	12月4日	22日	男、43歳、団体職員	〃	〃	

なお、これら同行者のうち、コレラ菌は発見されなかったものの、国内には存在しない食中毒原因菌が患者以外の3名から見い出されている。

3. 防疫対策

(1)コレラ防疫対策本部の設置

衛生研究所がコレラ菌とほぼ認定した時点（11月14日午後）において、県は厚生部長を本部長としてコレラ防疫対策本部を設置する一方、現地である氷見、小矢部の両保健所に各々現地支部を設置した。

(2)患者の隔離と家屋等の消毒

決定された3名の患者については直ちに所轄の伝染病院隔離病舎に収容する一方患者及び勤務先等の消毒を実施した。

(3)家族、接触者等の健康調査

患者と決定された3名の家族はもちろん患者の帰国後、土産の配布などでの立寄り先、特に会食、便所等を共にしたものを中心に健康調査を実施し、聞き取りによる健康の確認591件、検便延件数1,030件を行った。

(4)住民への啓もう普及

コレラ防疫の推進に際し、住民の理解と協力を得るため、コレラに関する知識、予防等についてのチラシを複製し保健所、市町村を通じ住民に配布した。

4. まとめ

(1)海外渡航者への衛生教育

外国旅行中、もっとも感染しやすい病気は、飲み水やなまものの飲食物を介するものが多

い。

特に東南アジアやアフリカ、あるいは中南米などの熱帯地域は、気温や湿度が高いため食品は腐敗しやすく、しかもゴキブリ、ハエ、ネズミなどそ族昆虫が多く、病原菌や寄生虫等の危険が高い。又衛生環境にも恵まれていないことから絶えず伝染病が蔓延している国もみうけられる。

これらの状況を旅行者が充分認識し、節度ある快適な旅行をするためには渡航者に対する衛生教育の徹底を図ることが必要である。

(2)旅行者に対する指導

近年の航空機の発達はもとより経済の発展により海外旅行ブームは一段と高揚し、年々旅行ツアーの量と質とに大きな変化がみられている。

巷間でうわさされている日本旅行者の開放的な行動や、コレラを始めとする伝染病等の国内持ち帰りなどを考えるに旅行業者の良識及び秩序ある企画はもちろん、旅行中における添乗員は旅行ツアーの健康管理者でもあることをより一層周知する必要がある。

(3)平常時防疫対策の強化

今回の氷見、小矢部で発生したコレラについては、関係各方面の熱意ある協力により幸いにも二次感染を防止することができたが、これも日頃からの防疫の訓練と器具機材の整備等によるものである。

これを機により一層平常時の防疫対策を強化し、発生時に万全を期す体制を確固なものとしていきたい。